広告　企画・制作　読売新聞社広告局

終末期医療 あなたの選択

超高齢社会を迎えた現代日本では、終末期医療に関する意識も変化してきています。海外では延命治療に対する自分の意思が表示できる「リビングウィル」を推進している国・地域もあり、「尊厳ある死」について、日本でも国民レベルでの深い議論が求められています。そこで、今回は「リビングウィル」をテーマに終末期医療について、日本医師会の横倉義武会長と日本尊厳死協会の岩尾總一郎理事長にお話を伺いました。

対談　日本医師会・横倉義武会長　日本尊厳死協会・岩尾總一郎理事長

コーディネーター・山本舞衣子（アナウンサー）

横倉会長

岩尾理事長

＊より良い最期

――超高齢社会の到来や寿命の伸長などから、国民の終末期医療に関する意識が変化してきました。「より良い最期を迎えること」について、私たちはどういう心構えが求められているのでしょうか。

岩尾　人間なら誰でも最期があります。それは自然の摂理ですから、医師でも、どうすることもできません。寿命が近づいてきたときに、どうふるまうのか、自分はどういう形で最期を迎えたいのか、一人一人が真剣に考えなくてはいけない時代にきています。

それは、いかに納得できる余生を過ごせるか、最期の限られた生をどう生きるかという問題と裏腹だと思います。自分でよく考えて、自分で決めるというのが今、求められています。

――人が最期を迎えるときは、どうあるべきか、日本医師会としてのお考えはいかがでしょう。

横倉　岩尾理事長がおっしゃるように、生きとし生けるものは、全て終わりがあります。ただ、最近、日本の社会はそのことを忘れているように感じます。人の死は、残されたものにとって、非常に辛いことです。残される側には、1日でも長く生きていてほしいという思いがあります。

しかしながら、人はいつか終末を迎えます。その際は、「人間らしく死にたい」「尊厳ある死を迎えたい」と強く願う人が多いと思うのです。われわれ医師としては、その人らしい終末を迎えていただけるよう、しっかり対応したいですし、体制も整えていきたいです。

そのために今年度から、日本医師会の生命倫理懇談会で、哲学者、宗教家、法律家など様々な分野の方を交えて議論を始めており、報告書をこの秋には取りまとめていただく予定です。

山本アナウンサー

＊意識の広がり

――患者さんの意思を確認する手段として「リビングウィル」を導入する医療機関が、わが国でも増えています。どのくらい普及しているのでしょうか。

岩尾　リビングウィルを実践している当協会の会員が約11万人ですから、国民全体からすると1％未満でしょう。保持率が25～40％と言われるアメリカや、12％というデータがあるドイツと比べるとかなり低い数字です。

ただ、低いながらも、尊厳ある死を考えるという取り組みは、医療の現場で広まりつつあります。たとえば、単に医療の面だけで考えるのではなく、家族との関係や残された時間の過ごし方などを総合して尊厳ある死を考える「Advance Care Planning（ACP）」を導入する病院が増えています。

横倉　どのような最期を迎えるかはご本人のみならず、残されたご家族の問題でもあるのです。「あのとき、ああしておけばよかった」という思いが必ず起きる。そうしたときに、リビングウィルが残されていると、家族の方が心安らかになることができます。そうしたことからも今後、かかりつけ医の役割がより重要になってくると思います。健康寿命を延ばすとともに、どうすれば健康な老後を送れるかという指導の面でも、大きな役割を果たすことが求められてくるでしょう。

「自分で考え自分で決める」心構えを

「尊厳」を支える リビングウィル

＊本人の望む形

――日本医師会としては、リビングウィルおよび終末期医療に対して、今後どのような取り組みを考えていらっしゃいますか。

横倉　患者さんに対する医師としての最後の仕事は、いかに死を看取るか、なのです。そのとき考えなくてはならないのは、本人の望まれるような尊厳のある死を迎えるために、何が患者さんにとって最善なのか、家族とも意思疎通を図りながら、患者さんのための医療を行うということです。

そのためには、できるだけ多くの国民の皆様に、リビングウィル、事前指示書を持ってもらえるよう、活動を進めていきたいと思っています。先ほど、かかりつけ医の重要性について言及しましたが、患者さんに、どういう形で意思を残しておいたらいいのかと聞かれたときに、かかりつけ医がきちんと答えられるようにしていきたいと思います。

――最後に、横倉会長から国民の皆様へのメッセージをお願いいたします。

横倉　終末期に関しては、人は健康なときにあまり考えることはありません。ただ、いつかは自分の生命が終わるときが来る。穏やかな終末を迎えたいというのが多くの人の願いであり、そのためにも、やはりしっかり自分の意思を残しておくということが大事だと思います。ぜひ、リビングウィルを残しておいてください。

――この機会に、あらためて家族みんなで考えるきっかけになるといいですね。ありがとうございました。

岩尾　いざというときに救急車を呼ぶと、彼らは救命救急が仕事ですから、命を助けようとしますが、その場合にどうしても、ご本人の意思と乖離が出てくることがあります。そういったときに、その人をよく知っているかかりつけ医に連絡してもらえれば、「これはもう死に至るプロセスなので、ご本人の意思を尊重しましょう」などと的確な判断をしてもらえるはずです。

（右から）岩尾理事長、横倉会長、山本さん

かかりつけ医 重要に

延命治療の意思 生前に「指示書」

リビングウィル　生前の意思の意味で、病気などで意思表示できなくなったときに備え、延命治療などの希望をあらかじめ残しておくこと。「事前指示書」とも呼ばれます。厚生労働省が策定した指針では、患者本人による決定を基本とした上で医療を進めることが原則だとしています。

寄稿　ノンフィクション作家　柳田 邦男さん

「尊厳ある死」とリビングウィル

死をめぐる尊厳という言葉には、二つの意味があると、私はかねて説いてきた。言い換えれば「尊厳死」と「尊厳ある死」の違いだ。「尊厳死」とは、一般的に使われている意味では、いよいよ臨終という時に、無益な延命治療などはしないで、痛み苦しみのない穏やかな旅立ちにしてほしいということ。その願いを家族や医師が戸惑わずに実行できるように本人の意思を予め文書に記しておくのが、リビングウィル（生前の意思）だ。つまり「尊厳死」とは、死の瞬間のあり方のことだ。

しかし、死というものをそういう形だけでとらえてよいのだろうか。そこで私はかねて「尊厳ある死」というもう一つの視点の重要性を説いてきた。人は死が避けられないものとして、月単位あるいは一年、一年という短い時間しか残されていないとわかった時、どうするか。人生の物語の最終章という最も大切な時期をどう生きるか。その生き方は、本人にとって、納得感をもって人生の幕引きをできるかどうかだけでなく、残された家族や友人の心に刻まれ、その後の生き方を支え膨らませるものとなる。「尊厳ある死」とは、その最終章の生き方全体をよりよいものにしようという意味だ。当然、リビングウィルとして書く内容は、死生観に沿った多項目になる。かかる「尊厳ある死」が達成されて、死の瞬間の「尊厳死」の意義も明確になるだろう。

現場　聖路加国際病院　同意書で意思確認

カルテに記載、院内で情報共有

聖路加国際病院（東京都中央区）では、患者のリビングウィルを確認するための小冊子「私のリビングウィル　自分らしい最期を迎えるために」を2009年11月に作成し、院内の目につくところでの配置を始めた。これまでの印刷部数は1万部を超えている。

同病院では、1983年から終末期医療についての検討を重ねてきた。その過程で、「患者ご本人の意思をわれわれ医療者は本当にわかっているのか」「ご本人が望まない延命治療が行われているのではないか」との疑問が生まれ、患者本人の意思を確認する目的で小冊子を作成した。

冊子ではリビングウィルや関連する医療用語を説明するとともに、生命維持装置や胃ろうなど延命治療における選択肢を設けており、患者本人の希望を示せるようになっている。また意思確認のために定期的な更新も勧めている。

「ACPの考えを取り入れ、意識や判断力をなくしたときに備え、冊子の中にある同意書には、ご本人、医療者だけでなく、同意者の署名欄も設けました。普段から家族と自分の最期について話しておくことで、自分らしい最期を迎えることができるのです」（岡田定・人間ドック科部長）

同意書は電子カルテに記載され、院内の医療者で情報共有し、いざというときに患者本人の意に沿う治療を行う仕組みが整えられている。

Advance Care Planning（ACP）＝将来の意思決定能力の低下に備え、その際に希望する治療法などについて、患者・家族・医療者が事前に話し合うプロセス。

日本医師会
Japan Medical Association